

性の多様性を前提とした学校教育の開発

眞野, 豊

<https://hdl.handle.net/2324/1807131>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 眞野 豊

論 文 名 : 性の多様性を前提とした学校教育の開発

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本の学校教育において前提とされているジェンダー規範及び異性愛規範を検討し、性の多様性を前提とした学校教育を開発することを目的とし、性の多様性を前提とした教育を支える理論的枠組みについて考察するとともに、教育カリキュラムや授業のあり方、教職員に対する研修の方法について具体的な提案を行った。

序章では、本論文を支える理論的な枠組みを設定するために、ジェンダー及びセクシュアリティと教育に関する理論、ホモフォビア／ヘテロセクシズムに関する理論、クィア・ペダゴジーに関する理論について先行研究をもとに考察し、性の多様性を前提とした学校教育に求められる5つの要素（①ジェンダー規範や異性愛規範を解体すること、②既存の知識や常識を再考すること、③多様性や流動性を歓迎すること、④性的マイノリティだけでなく性的マジョリティを対象とすること、⑤固定したカテゴリーを解体すること）を確認した。

I章「学校空間と性の多様性」では、日本国内で行われたいくつかの調査によって明らかにされてきた性的マイノリティの子どもをとりまく厳しい現実を確認するとともに、性的マイノリティに対する学校空間での支援の事例について批判的に検討した。その結果、性的マイノリティだけを対象とした支援だけでは不十分であり、性的マジョリティを対象とした教育的な働きかけの重要性が示された。続いて、教員たちへの聞き取り調査をもとに、これまでの人権同和教育が、性の多様性の問題にどのように応用されるのかを検討した。その結果、人権同和教育の理論は、性の多様性をめぐる差別問題についても応用できる部分が多々あるが、そのままでは応用できない部分もあることもわかった。例えば、人権同和教育では、長い時間をかけて学習を重ねた後に立場宣言をさせるというのが定石であったが、カミングアウト行為に比重を置くことは、性的マイノリティをクローゼット（性的指向を秘匿すること）の空間に押しとどめることにもなる。したがって、人権同和教育で蓄積されてきた理論を単に受け継ぐだけではなく、性の多様性という新たな視点から従来の人権同和教育を問い直す必要があることを指摘した。I章の最後には、諸外国の学校空間における事例を概観し、性の多様性をめぐる教育について分離的アプローチと統合的アプローチの観点から比較検討した。

II章「性の多様性と教育カリキュラム」では、はじめに、教育カリキュラムと平等及び公正について検討した。ここでは、パウロ・フレイレやベル・フックスの理論を参照しながら、教育の中立性に関する困難と問題性を指摘した。また、性の多様性を前提とした教育が誰に向けられた教育であるかについて検討した結果、多様な性を前提とした教育は、性的マイノリティだけに向けられたものではなく、性的マジョリティにとっても有用なものであることを理論的に明らかにした。続いて、日本の学校教育で行われる内容を規定している『学習指導要領』の全記述について、性の多様性の視点から検討し、問題点の整理をした。それらの検討をふまえて最後に、現行の『学習指導要

領』に対する具体的な改訂案を提示した。

Ⅲ章「性の多様性を教える授業」では、まず、性の多様性を教えることはどのようなことであるのかについて、ユネスコの『国際性教育ガイダンス』などを参照しながら検討した。さらに、「性的マイノリティについて知る」授業について批判的に検討し、マジョリティがマイノリティについて知るという一方的な学びではなく、マジョリティが自らの性について主体的に考えたり、自らの立場について考えたりする学びの重要性を指摘した。そこで、すべての子どもが性の多様性について主体的に学ぶための手立てとして本研究が採用したのが「性のグラデーションモデル」であった。具体的には、筆者が福岡県近郊の中学校及び小学校で行った授業を例に、性の多様性を教える授業のあり方について検討し、性をグラデーションとして捉える考え方の有効性を示すことができた。

Ⅳ章「教職員に対する性の多様性に関する研修」では、教職員に対する研修のあり方や具体的な研修内容について検討した。まず、筆者が教職員を対象に行ったアンケートなどをもとに、教職員の性の多様性に関する理解の実態を明らかにし、その結果を踏まえて教職員研修の方向性（①性的マイノリティを知るのではなく、性の多様性について知ることを大切にする、②人権の問題として性の多様性を理解すること、③差別や偏見そのものを問題にすること）を確認した。具体的には、筆者が行ってきた教職員研修を事例に内容を検討し、その結果、Ⅲ章の授業研究と同様に、性をグラデーションとして捉える考え方の有効性が再び示された。